

OMU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OMU students



プロフィール (Profile)

氏名 (富田 登望絵)

所属 (法学部)

学年 (3 年次生)

留学先 (Hartwick College)

留学期間 (2022/8/20~2023/6/11)

記入日 (Date) 2023/7/6

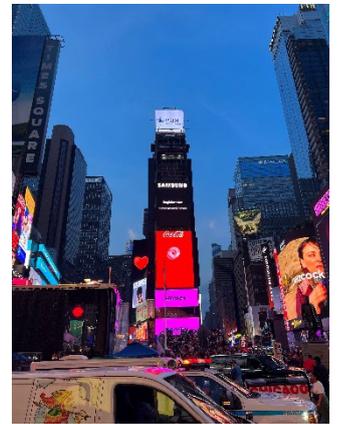
留学レポート Study Abroad Report

私は 2022 年の 8 月から約 1 年ほどアメリカのニューヨーク州で 1 年間留学してきました。ニューヨークという皆さんは超高層ビルが建ち並ぶ大都会を想像されると思いますが、私が住んでいたオニオンタという町はそれとはかけ離れた、静かでのどかな場所でした。生まれてから大阪にしか住んだことのない私が、異国の地で、慣れない言語で、どう生き抜いたか、そもそもどんなきっかけで留学することになったのか、その留学で何を学んだのか、このレポートを書きながら私自身の中でも考えをまとめようと思っています。

留学のきっかけ

私が留学を決意したきっかけを説明するには、高校時代にまで遡る必要があります。高校生の時の私は勉強する意味を見失い、校内の成績も模試の成績も芳しくありませんでした。何のために努力すればいいか見つけられなかった私は、結局どの大学にも合格できないまま浪人になってしまいました。しかしそんな時に、私が昔から海外ドラマや音楽の大ファンであること知っている母から、大学に進学してそこで交換留学してみたらどうかと勧められたことをきっかけに、勉強する意味や努力する意味を見出すことができました。そして勉強している間に、留学が夢のようなおとぎ話からどんどん何としても実現させたい目標に変わったおかげで、第一志望の大学合格も、夢のアメリカ留学も手に入れることができました。まとめると、私にとって留学は、努力するための理由として大きな役割を果たし、努力しているうちに気づいたら私の中で一つの大きなゴールとなっていた、ということです。

そしてもう一つ言及したいのは、なぜ留学のなかでも「認定留学」を選んだのかということです。私が思う一番の認定留学のメリットは大学に在学しながら留学できるうえに、留学先の大学の選択肢が交換留学よりもはるかに多い点です。大学に在学したままということは、努力次第で予定通りの年度に卒業することができ、就職活動や大学院入試などの留学後の将来への影響も少なく、また自分の理想に合った留学先を妥協なく選べる点で、私にとって最適な選択だと感じました。



アメリカでの生活

留学先では、本当にイメージ通りのアメリカでの大学の暮らしができたように思います。例えば、ピザや、ハンバーガー、カラフルな色のカップケーキが並ぶカフェテリアで毎日食事をしたり、寮でルームメイトと二人で住んだり、パジャマ姿で授業を受けている人を見たりといったことです。またいろんなもののサイズ感も違い、帰国後スーパーマーケットでカートを押している時にアメリカの巨大カートに慣れていて急にミニカーを押しているような気分になりました。また授業に関していうと、ダンスの授業を取り学期末に発表会でグループでダンスを踊っ





たり、ステージメイクアップの授業でドラッグクイーンや歌舞伎のメイクアップをしてみたり、政治学の授業では、日本とアメリカの政治を比較したプレゼンテーションを英語で行ったりと、日本では経験しえなかったことをたくさん経験することができました。そして、週末には友人とニューヨークシティまで行き、ブロードウェイショー鑑賞やショッピングを楽しみました。さらに冬と夏の長期休暇中には、フロリダのディズニーワールドやマイアミ、ボストンのハーバード大学や MIT を訪れ NBA を観戦するなど、ニューヨークと違う雰囲気も味わうことができ、授業期間も長期休暇期間も時間を最大限に有効活用できたと感じています。

留学後の変化

アメリカに留学してから、私の中で少しずつ様々なことに関する自分の考えが変わったように思います。例えば、日本にいた時は自分がどれくらいの知識を持っているかということが大事だと思っていましたが、アメリカの大学で、テストの結果だけでなく、日常的に教授や他の生徒たちと自分の持っている知識や疑問を共有することを求められるようになり、もしかしたら私たちは知識を増やすことのみがゴールではなく、自分が知識や関心を持っていることをアピールすることもゴールになりうるのかもしれないと思うようになりました。要するに、自分のスキル向上だけでなく、そのスキルを向上させるために教授や友人に疑問や知見を共有する積極性やコミュニケーション能力も重要だということに、アメリカでの留學生活の中で気づかされました。それは、知識の面だけに留まらず言語習得の面でも言えると思います。留學中、分からない言葉や言い回しがあつた時に、分からないからと諦めて黙り込んでしまふか、分からないなりに相手に理解してもらふよう説明しようとするか、選択を迫られる機会は何度もあり、後者を選ぶことによってはじめて言語を習得できると私は考えるようになりました。私も実際に、最初は本当に簡単な日常会話ですらスムーズに返事をする事ができず不安やストレスを感じていましたが何度もめげずに話し続けたおかげで、毎日赤ちゃんになったかのように簡単な文法や語彙をどんどん吸収して英語への不自由さや自信の無さを取り除いていったことを覚えています。



さらに、私はアメリカにいるなかで日本では感じられなかつたことも感じられるようになりました。それは、マイノリティになるとはどういうことかということです。今までの学校教育の中で私はマイノリティとはどういうものか十分に勉強し、それなりにマイノリティへの共感もしたつもりでいました。しかし、実際に自分が他の人たちと違ふ肌や目の色をして違ふ言語を話す環境に身を置いたとき、生まれて初めて人とは違ふということのコンプレックスや日々の暮らしの困難さを痛感しました。この経験により、私はより日本における在日外国人はどのような対応を取られているのかなどのニュースについて敏感になり、自分の意見を持つようにもなりました。このように、私はアメリカ留学によって自分が想像できなかつた範囲にまで変化したようです。

私がこのレポートで最も伝えたいこと、それは留学によりもたらされる変化の素晴らしさです。アメリカにいた約 1 年間、予想をはるかに超える言語の壁や文化の違ひ、その土地でしかできない経験を経て非常に多くのことを学びました。異文化をポジティブな面だけでなくネガティブな面も見て、言語を日常生活を生き抜くために必死に習得したという経験は、これからの大学生活だけでなくその先の人生でもきっと役に立つと考えています。

